

2015年度立命館大学校友会

東日本大震災復興支援事業 東北応援ツアー レポート

奥山 亮 1995年 理工学部機械工学科

参加コース：A福島県コース

今回、はじめて応援ツアー企画に応募しようと思ったのは、新聞等の媒体を通しての福島からはなかなか真実が見えてこないような気がしていたこともあり、自分の目で確認できることは確認しておきたいし、確認すべきだという思いからです。

そういうこともあり、今回の応援ツアーで強く印象に残ったことを中心に書きたいと思います。

今でも強く印象に残っているのは、浪江の町の、ある民家の軒先に大きく立派に生ったたくさんの柿の実の橙色の鮮やかさで、何軒か似たような光景がありました。ただ、今となってはその柿の実を採る人も愛でる人もいない、ということが誰の目にも明らかなのがとても哀しく感じました。人の営みがなくても季節だけが巡り続けることに、これが全てではないけれども今の福島を表すとても象徴的な光景だと強く感じたのです。

浪江町役場の方のご厚意で、浪江の町をバスで案内していただきました。町の、目にするもの全て、あまりのことに無言となってしまふ。斜めに傾げたままの家や二階が一階へ落ちてしまった家、乗降者のいない駅に電車の通らない踏切、…。いずれもバスの車窓から見た小雨降る浪江の風景なのですが、およそ4年半前の震災から時間が止まったような錯覚を起こすのに十分であり、言葉を失う風景とはまさにこういうことを指すのでしょうか。

バスで町の中心を抜け、海岸方面へ向かいました。そこは原発から5キロ先の地点とのことでしたが、一面津波の爪痕が今も残ったままで、何軒かの家は基礎を残していました。それらがかろうじてここに人の営みがあったのだという証明となっていました。

浪江町は勿論、浪江までの道中の間にも、これまではメディアの映像を通してでしか見たことがなかった除染で出た土砂の黒袋を、車窓からではあったのですが、間近で見ることができました。今も積み上げられて続ける除染土の袋の、あまりの規模を目の当たりにして気の遠くなるような感じを覚えました。

当地を訪れて、復興に向けた地元の人たちの苦難も現在進行形のことなのだということが強く感じた旅でしたが、それに負けまいとする福島の人たちの強い気概も感じる事ができた旅だと思っております。また、福島へ足を運ぶことが支援でもあるとも感じました。

最後にこの貴重なツアーを企画し、ご尽力いただいた本校校友会事務局の皆様、福島県校友会の皆様がこの場を借りて感謝申し上げます。